

神戸学術叢書 1

ユーラシア語族の可能性

岸 本 通 夫

1971

神戸学術出版

ユーラシア語族の可能性

岸 本 通 夫

神戸学術出版

＜著者略歴＞

岸本通夫（きしもとみちお）

1918年、福岡県行橋市に生まれる。

神戸外大教授、大阪市大助教授を経て、現在大阪大学教授（教養部）。

著書、古代オリエント（世界の歴史、第2巻、河出書房新社）、ほか。

現住所 神戸市垂水区平磯町
2—3—7

＜神戸学術叢書1＞

1971年11月10日刊

定価450円

ユーラシア語族の可能性

著者 岸 本 通 夫

発行所 神戸市長田区重池町1丁目233

神 戸 学 術 出 版

代表 落 合 重 信

電話 (078) 691—5 5 3 9

販売所 東京都千代田区神田神保町1の7

株式会社 小 宮 山 書 店

電話 (03) 291—0495 (代)

振替 東京 151288番

ユーラシア語族の可能性

目 次

はじめに.....	3
第1章 ユーラシア語族の概念.....	7
第2章 ユーラシア諸語の共通点 (I) ——定動詞によって文の終結すること——.....	9
第3章 語順に関する一考察.....	15
第4章 ユーラシア諸語の共通点 (II) ——接尾的語構成——.....	21
第5章 類型学の見方.....	29
第6章 ユーラシア諸語の共通点 (III) ——語頭 r 音の存しないこと——.....	34
第7章 ユーラシア諸語の共通点 (IV) ——語頭重子音の存しないこと——.....	38
第8章 ユーラシア諸語と母音調和.....	41
第9章 ユーラシア諸語の共通点 (V) ——Urablaut——.....	43
第10章 ユーラシア諸語の共通点 (VI) ——Urstufenwechsel——.....	46
第11章 ユーラシア諸語と形容詞の級.....	53
第12章 ユーラシア諸語と人称変化.....	55
第13章 関係代名詞について.....	60
第14章 ユーラシア諸語の共通点 (VII) ——中止形の発達——.....	64
第15章 ユーラシア諸語と性.....	69

第16章 ユーラシア諸語と数	72
第17章 ユーラシア共通基語の文法的性格と各方言への展開	78
第18章 ユーラシア語族の可能性を吟味するための方法について	81
補説・第1章 ユーラシア諸語に見出される語彙等の若干の一致	85
第2章 数詞の不一致について	87
第3章 日本語の助詞の二系列と印欧諸語の <i>particula</i>	89
第4章 梅棹さんへの手紙	91
付表・ユーラシア諸語の特徴と若干の対応	97
参考文献	99

ユーラシア語族の可能性

目 次

はじめに.....	3
第1章 ユーラシア語族の概念.....	7
第2章 ユーラシア諸語の共通点 (I) ——定動詞によって文の終結すること——.....	9
第3章 語順に関する一考察.....	15
第4章 ユーラシア諸語の共通点 (II) ——接尾的語構成——.....	21
第5章 類型学の見方.....	29
第6章 ユーラシア諸語の共通点 (III) ——語頭 r 音の存しないこと——.....	34
第7章 ユーラシア諸語の共通点 (IV) ——語頭重子音の存しないこと——.....	38
第8章 ユーラシア諸語と母音調和.....	41
第9章 ユーラシア諸語の共通点 (V) ——Urablaut——.....	43
第10章 ユーラシア諸語の共通点 (VI) ——Urstufenwechsel——.....	46
第11章 ユーラシア諸語と形容詞の級.....	53
第12章 ユーラシア諸語と人称変化.....	55
第13章 関係代名詞について.....	60
第14章 ユーラシア諸語の共通点 (VII) ——中止形の発達——.....	64
第15章 ユーラシア諸語と性.....	69

第16章 ユーラシア諸語と数	72
第17章 ユーラシア共通基語の文法的性格と各方言への展開	78
第18章 ユーラシア語族の可能性を吟味するための方法について	81
補説・第1章 ユーラシア諸語に見出される語彙等の若干の一致	85
第2章 数詞の不一致について	87
第3章 日本語の助詞の二系列と印欧諸語の <i>particula</i>	89
第4章 梅棹さんへの手紙	91
付表・ユーラシア諸語の特徴と若干の対応	97
参考文献	99

ユーラシア語族の可能性

はじめに

筆者が、いわゆるウラル＝アルタイ語族と印欧語族とを包括するユーラシア語族の構想を抱懐するに至つたについては、大野晋氏の『日本語の起源』に負う所も少なくないように思うので、はじめにいささかその点を述べて、これをもって本論への導きとさせていただきます。

実は筆者は、数年間にわたり同書を、神戸外大における言語学概論の教材に使用して来たのであるが、毎年同書 pp. 140～143 の印欧語諸方言とアルタイ諸語との特徴を対比した箇所に至るたびに、少なからず厭然とせぬものを感じざるを得ず、この点を年毎に繰返して考えさせられるうちに、印欧共通基語とウラル＝アルタイ諸語との両者は、セム＝ハム諸語とかバントウ語、あるいは中国語、マラヨ＝ポリネシア諸語等々のなほだしく言語構造を異にする諸言語の、この地球上に分布することを思い、これらと対比して考察するときは、むしろ印欧語・ウラル＝アルタイ語の両者の間に、酷似と称するも過言でない構造上の類似が認められるように感ぜられるに至つたのである。

大野氏の上掲箇所における特徴の列挙は、二三の打消し難い誤りを含んでいるほか印欧諸語の場合、共通基語より今日の諸方言に至る数千年の言語史の間に、言語構造上の著しい変動のあつた事実が没却されているのではないかと思われる。一応これらの誤謬の二三点を指摘して見たいが、安田徳太郎氏の『万葉集の謎』とは異なり、大野氏の著書は、専門家の手により、まずは着実な方法的基礎に立ち、しかも一般読者にも近づき易いことを期して書かれた好著であり、専門家の間でも重視されているだけに、いささか印欧語を専門とする筆者としては、同氏の印欧語に関する無理解が瑕疵ながらやや正視に堪えず、はなはだ残念に思われるのである。

まず、大野氏の挙げる第(3)点、冠詞について。「印欧語には冠詞というものがあり、……」(p. 140)とあるが、ヒッタイト語(略 *hitt.*)・サンスクリット語(略 *skr.*)・ホメーロスのギリシャ語(略 *hom.*)・ラテン語(略 *lat.*)・ゴート語(略 *got.*)等

々、古代の印欧語諸方言はおおむねこれを欠き、従つて印欧共通基語（略 *i.-e.*）に冠詞があつたとは考えられず、さらに、近代の方言のみに限定しても、ロシア語（略 *russ.*）・チェコ語（略 *tseh.*）のように今日に至るも冠詞を全く欠く方言があり、最後に印欧語以外でも、アラビア語（略 *ar.*）・ヘブライ語（略 *hebr.*）のように冠詞をもつ言語があるので、冠詞のあることをもつて印欧語の特徴と見るがごときは、全く根拠のないことのように思われる。

一般に冠詞とは、特に定冠詞の場合、指示の機能の薄弱になった指示詞の一種に過ぎず、その有無は、当該言語の基本的特徴というよりは、むしろその言語を用いる民族の経て来た精神史乃至文化史的背景といったものに一層多く結び付いた言語現象の一つではあるまいかと思われるので、印欧語とウラル＝アルタイ語とを対比して、その各々の特徴を見出だそうといった場合、はたして適切な指標 *Markmal* たりうるか否か、疑問なきを得ない。

ただし、言語現象のうちのいかなるものが、固有に言語的な現象であり、いかなるものが、その民族の精神史や文化史とつながりの深い現象であるかは、極めて興味深くはあるが、一面また複雑微妙なかつまた困難な問題であるべく、後にいささか触れる所あるべき類型学 *typologia* の方法のごときを駆使して、将来追い追いに検討説明するべき問題の一つであらう。

つぎに、大野氏の指摘される第(5)項であるが、「アルタイ語では、一般に名詞と形容詞との間に、はつきりした区別がない」(p.141)といわれる。これは、例えば、アカガネ“銅”とハガネ“鋼”との二つの表現を比較した場合、後尾の名詞カネを修飾する形容詞アカ“赤”と名詞ハ“刃”との間に文法形態上の明らかな区別がないという意味であるらしいが、この様な見方には、日本のアルタイ語学者自身からの有力な反論がまずあるようである(1)。

かつまた一方、その意味は大変異なるが、名詞と形容詞との間に明かな境界線を画し難いのは、むしろ印欧語の方であると言わねば理由が存する。すなわち、印欧語においては、大部分の方言において、かつ恐らくその共通基語において、名詞の曲用 *declinatio* と形容詞の曲用とは、原則的には同一であり、さらにまた、例えば、形容詞の中性形はこれを名詞として用いてその性質を帯びた物を、男性形はその性質の人を表わしうる一方、名詞をそのまま修飾語として全く一般の形容詞と同様に用いることができるなど、名詞・形容詞の相通・転移が極めて容易かつ自由であるのが、今日なお多くの印欧語方言の通性である。

これを要するに、上に引いた大野氏の言は、なお一層の検討を経て、もつと精確周到な表現を用いられるか、あるいはむしろ削除してしまわれるかするのが、適当であらう。

1) 柴田武、トルコ語（世界言語概説・下、1955）p.606.

つづいて同じ第(5)項に、「印欧語では、『花・アル・美』と表現して、『アル』という語を中間にはさむ」(p. 141)とあるが、例えば、今日の方言の中にさえ、*russ.* のように、‘Цвет красив.’ (花・美し)と、むしろ繫辞 *copula* を用いない表現の方が正常であるような方言が見出だされ、さらに古代の方言にさか上るほど、ギリシア語(略 *gr.*)の ‘καλον τὸ ἄνθος.’ (美し・花)の表現をはじめ、繫辞を欠く表現がしきりに見出されるようになる。さらにまた、繫辞必ずしも主語たる名詞と述語たる形容詞との「中間に」はさまれることを要せず、例えば、*lat.* ‘Flos pulcher est.’ (花・美しく・あり)のごとき語順も可能であつた。

第三に、もつともはなはだしい誤謬は、第(6)項「アルタイ語の形容詞に、比較級の特別の形がない」との立言である。例えば、トルコ語(略 *tk.*)の方言カシュガル語 *Kaschgari* には、*buyuk* “大きい” に対する比較級 *buyuk-rek* “一層大きい” があり⁽²⁾、オスマン語 *Osmanli* (略 *osm.*)においても、古い比較級の語尾 *-rak/-rek* が廃れた結果、今の *osm.* に比較級特有の形がなくなつたのであるから⁽³⁾、おそらく *tk.* 共通基語には、**-rak/-rek* なる比較級の接尾辞があつたものと思われる。

最後に今一つ、第(7)項に、「アルタイ語の動詞の基本形は、そのまま名詞に用いられる」(p. 141)とあるが、動詞からの語根名詞乃至語幹名詞は、決してアルタイ語のみの専有物ではなく、印欧語に例を求めるならば、語根名詞のみに限っても、*i.-e. *√wek-* “言う” からの *skr. vāc* “言”，*lat. vox* “声”，*gr. Φόψ* “声”；*i.-e. *√reg-* “治める” からの *skr. rāj-* “王”，*lat. rēx* “王”；*i.-e. *√weid-* “知る” からの *skr. vid-* “知識”；*i.-e. *√leuk-* “輝やく” からの *lat. lūx* “光” 等々枚挙にいとまがないばかりでなく、セム語にその例を探しても、*sem.*⁽⁴⁾ **MLK* “支配する”：*ar. malk*, *hebr. mélek* < **malk* “王”；*sem. *ZR* “播く”：*ar. zar*⁵, *hebr. zérah* < **zar*⁵ “種”；*sem. *QDŠ* “淨し”：*ar. quds* “清淨”，*hebr. qōdeš* < **qudš* “聖所”；*sem. *NPŠ* “息を吹きかける”：*ar. nafs*, *hebr. népheš* < **napš* “息，命，魂” 等々、ここでもその例は枚挙にいとまがない。

つづいて、同じ第(7)項に「(動詞の基本形が)そのまま命令形に用いられることが多い」(p. 141)とあるが、この現象もまた、何らアルタイ諸語のみに特徴的なものではなく、印欧語からは *skr. bhāra*, *gr. φέρω* “運べ”；*skr. bhāva* “あれ，なれ”；*gr. λύε* “解け”；*lat. amā* “愛せよ”，*habē* “持て”，*es* “あれ”のごとく動詞の語幹形がそのまま能動相命令法(2人称単数)の形として用いられることが多く、セム語においても、*sem. *qutúl* > *ar. uqtúl*, *hebr. q’ṭōl* “殺せ”⁽⁵⁾ の型の *はだか* の語幹形が、動詞の基本様態 Grundform od. Grundstamm——すなわち *hebr.* 文法

2) 鷲見秀芳，中央アジア・トルコ語の研究。I. (1944) p. 44.

3) J. Németh, Türkische Grammatik. (1917) p. 40.

4) *sem.* は、セム共通基語の略。

5) cf. C. Brockelmann, Semitische Sprachwissenschaft. (1916) pp. 121, 128, 133.

の Qal 態——に対する命令法（2 人称単数男性）の形である。

思うに、動詞の基本形というか、語幹形乃至語根形そのものが、そのまま名詞として、および命令形（人称活用ある言語の場合は、2 人称単数の命令形）として、用いられるのは、世界の諸言語にその例がはなはだ多いのではあるまいか。しかりとすれば、大野氏の挙げられた第(7)項は、これをある特定の言語の特徴とはなしえまい。よろしく第(7)項は抹消されてしかるべきではないか。

一方では、アルタイ諸語の共通点として、中止形 *suspensivum* の発達という、この顕著な事実を是非挙げていただきたかった。この点については、いずれ後述する所であろうが、日本語（略 *jap.*）の“行き、行キテ、行カバ、行ケバ、行ケドモ、行クニ”等々の、単文を次に連鎖接続して行くための動詞の諸形——蒙古語（略 *Mg.*）文法のいわゆる副動詞または動副詞 *converbium*——を、筆者は中止形と総称することにしたいが、この種の動詞形が豊富に発達していて、二つの文節 *Satz, proposition* の間の関係のほとんどあらゆる陰影 *nuance* を明確に表現しうることは、いわゆる *gerundium* の形を除いてこの種の表現形式を有しないものが多い印欧諸語方言に對比するとき、いわゆるアルタイ諸語とウラル語（略 *ur.*）（および極北諸語・チベット＝ビルマ語諸方言さらに印欧語族に属するヒンディー *Hindi* 等をはじめインドの各種の方言）の極めて著しい特徴とすべきであろう。

大野氏の挙げられたアルタイ諸語の共通点12項⁽⁶⁾については、なお問題にしたい点もあるが、いずれは追つて本論において触れるはずであるから、今は以上をもつてはじめて言葉を終わることとする。

6) 大野氏の見方の背後には、実は我が国言語学の先蹤藤岡勝二博士の见解が横たわっている（大野晋，日本語（世界言語概説・下）pp. 288-289）

第1章 ユーラシア語族の概念

Die eurasische Sprachfamilie

さて、上述したように、筆者は、印欧共通基語と、ウラル共通基語およびいわゆるアルタイ諸語——詳しくはトルコ語・蒙古語・トゥングース諸語（略 *tg.*）・朝鮮語（略 *kor.*）・日本語——との間に、大局的に見て言語構造上の著しい相似があるものと認識し、かつこれらの諸言語が、地理的に見ておおむねユーラシア大陸の北半部に東西に相連続して分布している事実を合わせ考えて、これら旧大陸北部の諸言語は、帰する所悠遠の太古に存したある一つの共通基語より分化派生したものであり、従つてこれらは一つの大語族を形成するものと見ることができようと考え、その可能性を検討して、なしうればかかる仮説の基礎付け・立証を試みようとするものであるが、この種の構想を抱き、この種の学説を唱えたものは、決して筆者が最初ではないことは周知の通りである。すなわち、例えば、H. Pedersen においてノストラ *Nostratisch* 語族の提唱があつた⁷⁾。しかしながら、セム語族等をもこれに含めようとする Pedersen の見解に賛同しかねる筆者は、あえてユーラシア語族の語を振んだが、実はこの語もまたすでに H. Koppelman の用いた所であつた⁸⁾。従つて、ユーラシア語族という用語自体には、何ら新味はないが、方法的には、欧州の学者が、不安定であつて、容易に浮動しがちとして怪視する語順——特に定動詞⁹⁾ *verbum finitum* の位置——の問題を、もつとも重要視して、視界の中心点におき、さらに、この点に関する考察に基づいて、上記の印欧語・ウラル語・トルコ語・蒙古語・トゥングース語・朝鮮語・日本語のほか、アイヌ語（略 *ain.*）・ギリヤーク語（略 *gil.*）・ユカギル語（略 *yuk.*）・チュクチ諸語（略 *čuk.*）¹⁰⁾・エスキモー語（略 *esk.*）等の、いわゆる極北

7) H. Pedersen, *Türkische Lautgesetze*. (ZDMG. 1903) p. 560.

8) H. Koppelman, *Die eurasische Sprachfamilie*. Indogermanisch, Koreanisch und Verwandtes. (1933)

9) 用語としては、むしろ「述動詞」という方が適切であろうが、本論文では「定動詞」の語で一貫した。文の述語たる動詞の意味。

10) すなわち、*Čukči* 語・*Korjak* 語（略 *korj.*）・*Kamčadal* 語（略 *kamč.*）の三つ、この三言語は同系をなすものと認められている：cf. Juho Ankeria, *Das Verhältnis der tschuktschischen Sprachgruppe zu dem uralischen Sprachstamme*. (1940) p. 111; Meillet=Cohen, 泉井訳, *世界の言語* p. 424; 高橋盛孝, *北方諸言語概説*. p. 21.

Hyperboreisch 諸語または古アジア Palaeoasiatisch 諸語と称せられる言語も、これに含めて考えようとするものである。

ユーラシア語族の名は、以上の諸言語が一語族をなすことが立証せられるまでは、その使用を控えるべきであるが、以下においては、便宜上、本論において問題にすべき上記の諸言語を総称するのに、ユーラシア諸語という用語を用いることにする。またこれらの諸語の共通基語として仮想しようとする言語にも、仮にユーラシア共通基語の名を用いることにする。

第2章 ユーラシア諸語の共通点 (I)

——定動詞によって文の終結すること——

jap., *kor.*, *tg.*, *mg.*, *tk.* の諸語において、原則的・標準的に、定動詞が文 Satz, phrase の終りに来たり、すなわち定動詞が文を閉じる役割を果たすことは、まず周知の事柄に属すであろうから、解説を要しないであろう(11)。

ain. においては、その定動詞形のいわゆる抱合語的 incorporans 性格について別の問題があるにせよ、ともかくその抱合的な定動詞形そのものは、他の要素を含むとしても、その全体がとにかく文尾に立つのであるから、その意味でやはり定動詞が文を閉ざすものとすることができる。ちなみに文例を挙げれば(12)：

kamui umma raiki.

熊(が) 馬(を) 殺した

tokap čup iyosakari wa payekaikur šikuškare.

太陽(が) 代つて 旅人(を) てらしつけた

gil. も定動詞の文尾に位置を占めることは、上の諸言語と同様であるが、この言語についても、二三の文例を挙げれば(13)：

ni wakkei klyrox šont.

私(は) 箱(を) 戸外へ もつて行く

nikbyn njeenyn daklaŋ xuxt xer lašifynt.

人(が) 一人 いと暖かい 外套(を) 着て 通り過ぎようとした

ŋač kavr tamik čin uigir ŋairuf čin kavr puiligint.

足 なくて 手 も なくて 羽 も なくて 飛ぶ

最後に *esk.* の文例(14)：

Päviap angutâta gingmê nerdlerpai.

パヴィアの (その) 父(が) 犬(を) やしなつた

- 11) e. gr. cf. P. Poucha, The syntactical Relationship of some asianic languages. (Symb. Hrozný III 19) pp. 439 ff.
- 12) 文例は、金田一京助、アイヌ語(世界言語概説。下、研究社 1955) pp. 735, 749.
- 13) 文例は、高橋盛孝、樺太ギリヤク語(1942) pp. 62, 113 および服部健、ギリヤク語(世界言語概説・下、研究社 1955) p. 771.
- 14) 文例は、Schultz-Lorentzen, A Grammar of the West Greenlandic Language より。

nerrivik sanassumut iluarsaripá.

机(を) 大工に (彼は) 見させた

定動詞の位置について検討を要するのは、ウラル語族と印欧語族および *yuk.* と *čuk.* 諸語の場合である。

まずウラル語族について。例えば、ハンガリー語(略 *ung.*) およびフィン語(略 *finn.*) から各一例を求めれば⁽¹⁵⁾：

ung. Én még nem voltam éppen a városban.

私は⁽¹⁾ まだ⁽²⁾ ない⁽⁶⁾ いたことが⁽⁵⁾ この⁽³⁾ 都会に⁽⁴⁾

私はまだこの都会にいたことがない

finn. Hän sanoo, että hän opiskelee suomea

彼は⁽¹⁾ 云う⁽⁶⁾ と⁽⁵⁾ 自分が⁽²⁾ 学んでいる⁽³⁾ フィン語を⁽⁴⁾

彼は、自分がフィン語を学んでいると、云う

のように、近代欧州の印欧語諸方言の大部分と同様の(主語+定動詞+各種の補語)の語順が用いられ、*ung.* の方はそれでも、その語順が比較的自由であつて、従つて⁽¹⁶⁾：

A vonat öt perc múlva itt lesz.

列車は 5 分 後に ここへ 来よう

のごとく、定動詞が文の終りに立つことも可能であるが、*finn.* に至つては、むしろ欧州の近代諸語と同様の語順が標準的 *normal* である⁽¹⁷⁾。その他の方言について見ても、ズリエン語・チェレミス語・モルドウィン語・ラプ語においては、(主語+述語+各種の補語)の語順が標準的であるか、または *ung.* のように、なお若干の自由があるかのいずれかであつて、定動詞の位置が原則的に文尾に定まつているのは、サモイェド(略 *sam.*) 諸方言・オスチャク語・ヴォグル語・ヴォチャク語の少数に過ぎない⁽¹⁸⁾。しかしながら恐らく多くの点において古風な相 *Archaismen* を保存しているかと推測せられる *sam.* 諸方言 およびフィノ=ウグル(略 *f.-u.*) 諸方言中の最東方に分布するウラル山脈東西の3方言において、定動詞の文尾に立つことが標準的であることは極めて示唆的なように思われる。すなわち筆者は、*ur.* 諸語もまた元来は、定動詞をもつて文を閉ざすのを本来の語順としたものであり、従つてまたこれが *ur.* 共通基語の語順であつたと考えるのである。すなわち、*finn.*、*ung.* 等の西方の諸方言における、自由な語順または(主語+定動詞+……)の語順は、聖書や文学作品などの翻訳その他、様々の文化的交渉を通じて、近代のゲルマン語派諸方言乃至

15) 今岡十一郎、洪牙利語四週間、(1942) p. 75 および尾崎義、フィン語四週間(1952) p. 29.

16) 今岡, op. cit., p. 63.

17) 尾崎, op. cit., pp. 254-6.

18) *ur.* 諸語における語順の調査は、Bj. Collinder, Survey of the Uralic Languages. (1957) によつた。

russ. を主とするスラヴ語派諸方言の影響を受けて、*ur.* 語本来の語順に動揺が生じた結果と解しうるのはないか。語脈を異にする外国語が語順の上に影響を及ぼすことがあるか、もしありとすれば、いかなる形でその影響が実現されて行くかの問題は、なお具体的な実例を集めて詳しく研究せられる要があるが、欧州乃至欧露の *f.-u.* 言語方言の語順について、欧州の近代印欧語方言の影響があつたという推定は許されてよいかと考える。というのは、追つて後述するごとく、*ur.* 諸語もまた、アルタイ諸語等と同様に、全般的に見て基本的に接尾的構成の言語であり、この事実の後述する類型学の見方を適用するときは、この面からも、*ur.* 諸語、従つて *ur.* 共通基語の本来の語順が、定動詞を以て文を結ぶ型に属したことを傍証しうるものと考えらるからである。

次に印欧語の語順について考える。これについては、*gr., lat., Ṛgveda* (略 RV.) における *skr.* 等の語順を根拠として、古代の印欧語方言においては、一般に語順が自由であつたとし、従つてその共通基語においても語順は同じの自由であつたと推論して、古代の方言から近代西欧の諸方言に至る間に、語順の定着が生じて、英・独・蘭・丁・瑞典・仏・伊・西等々の諸言語の、今日におけるもつとも基本的な語順たる（主語＋述語＋……）の型が次第に定立せられたとするのが、欧州の学者の間における支配的な常識のようである(19)。はたして事実はその通りであるか？

筆者は、*hitt.* の語順・*Śatapathabrāhmaṇa* (略 ŚB) 等の Veda 散文の語順およびドイツ語の副文章における語順に注目を払う必要があると考える。これらの三つの場合においては、文 Satz, phrase が定動詞をもつて終結すること、全くアルタイ諸語の場合と同様であつて、特に *hitt.* や Veda の散文など、近代欧州の諸言語とは異なり、大文字や句読点の秩序ある使用によつて、文首・文尾の明瞭に区画されていない古代語を、我々が適宜に分節して解読することができるのは、一つには、動詞定形の出現がまず原則的には、一つの文の終結を標識して、そこに姿なきコンマまたはピリオドを読むことができるからに他ならない。

人あるいは、定動詞終結的構文の ŚB 等と自由語順の構文の RV の文献学的研究を根拠にとつて、RV がそのインド文学史の最古の monumentum であるとの学界の常識を指摘し、RV の自由な語順こそ印欧語本来の語順であつて、ŚB 等の語順のごときは、すなわち、アーリア語のインドにおいて、言語基層 substratum をなしたドラヴィダ語等のアジア的言語の影響 asianismus によるものと駁論するかも知れぬ(20)。しかしながら筆者は、RV が韻文で書かれるために彼らねばならなかつた制限の方を一層重視すべきではないかと思う。

例えば今、日本語の場合を例にとつて見るとする。古事記の散文と、一部はその間

19) 高津春繁, 印欧語比較文法, pp. 328-330.

20) Pavel Poucha, The Syntactical Relationship of some Asiatic Languages. (Symb. Hrozný II.) pp. 290-292.

にも点綴されている記紀歌謡および万葉集中の古層に属する歌とを取つて、両者の間の時代の先後をいうならば、この場合、記紀歌謡の方が古期の成立に属することは議論の余地がない。さてこれらの資料について、定動詞の位置に関する統計を求めるならば、古事記の散文の場合、定動詞文尾の例がおそらく100%の率を示すに反し、記紀歌謡等においては、少なくとも何%かは、定動詞が文尾以外の位置を占める例が見出だされるであろう。かくして以上の事実に基づいて、「*jap.*の語順は、おそらく元来は自由であつたのであるが、文献によつてさか上りうる*jap.*語史の最古の段階において、すでにその語順は定動詞終結的方向に固定して行く顕著な傾向を示しておりやがて古事記の散文に至つて、定動詞の位置の固定が完了した」というのがごとき解釈が果たして受け容れられえようか。

無論、RVにおける語順の自由さと、記紀歌謡等における語順の自由さとを、筆者は決して同列・同程度において考えている訳ではない。すでにRV期の*skr.*においては、RVにおける語順の自由を可能ならしめるに足だけの素地が準備されていたのであろう、すなわち、各語そのもの——特に定動詞そのものに至るまでが、その位置を自由に択びうるだけの、完全に近い自律性または独立性を得ていたものと、筆者自身もこの点は認めるものではあるが、しかもなお、韻律の要求上標準的ならぬ語順のしばしば用いられがちである韻文の場合は別として、日常的の文体に一層近い散文においては、ほとんど100%近くまで定動詞が文を終結している事実は注目し値すべく、おそらくVeda時代の*skr.*においても、さらにはその最古期に属するとされるRV時代においても、定動詞をもつて文を納めるのが、もつとも自然で無理のない標準的の語順であつたものと筆者は考えるのである。

*ur.*語の場合と同じく、印欧語の場合においても、この言語——特にその共通基語が、概して全般的に接尾の構成の言語であつた事実が、後述する類型学的観点よりの照明を受けるときは、印欧共通基語または定動詞終結的構文を標準的としたことを傍証してくれるであろう。この点は後段にゆずるとして、要するに筆者は、印欧語もまた、少なくともその共通基語においては、元来は定動詞をもつて文を閉ざすのを原則的・標準的とした言語であつたが、その後何らかの要因のために、文中の語の位置は定動詞の位置までが、ほとんど全く自由になり、その状況が久しく続いたが、やがて西欧の大部分の方言においては、近代に向つて、今度はあらためて、(主語+定動詞+……)の語順を原則的とする方向を歩んだものと理解する。

*yuk.*の語順に関しても、次のごとき実例に即して考えるときは、やはり定動詞終結の構文を原則とすることに变りはなく、実は大きい問題はないのであるが、この例文を仰いだ Bj. Collinder, *Jukagirisch u. Uralisch.* (Uppsala Univ. Årsskrift 1940) に H. Winkler の、「*yuk.*の語順は、アルタイ語的ならず」とする見解が引かれているので(21)、この点を駁しておく要があると考えた。まず例文をあげる(22)：